

Peshawar-kai

ペシャワール会報

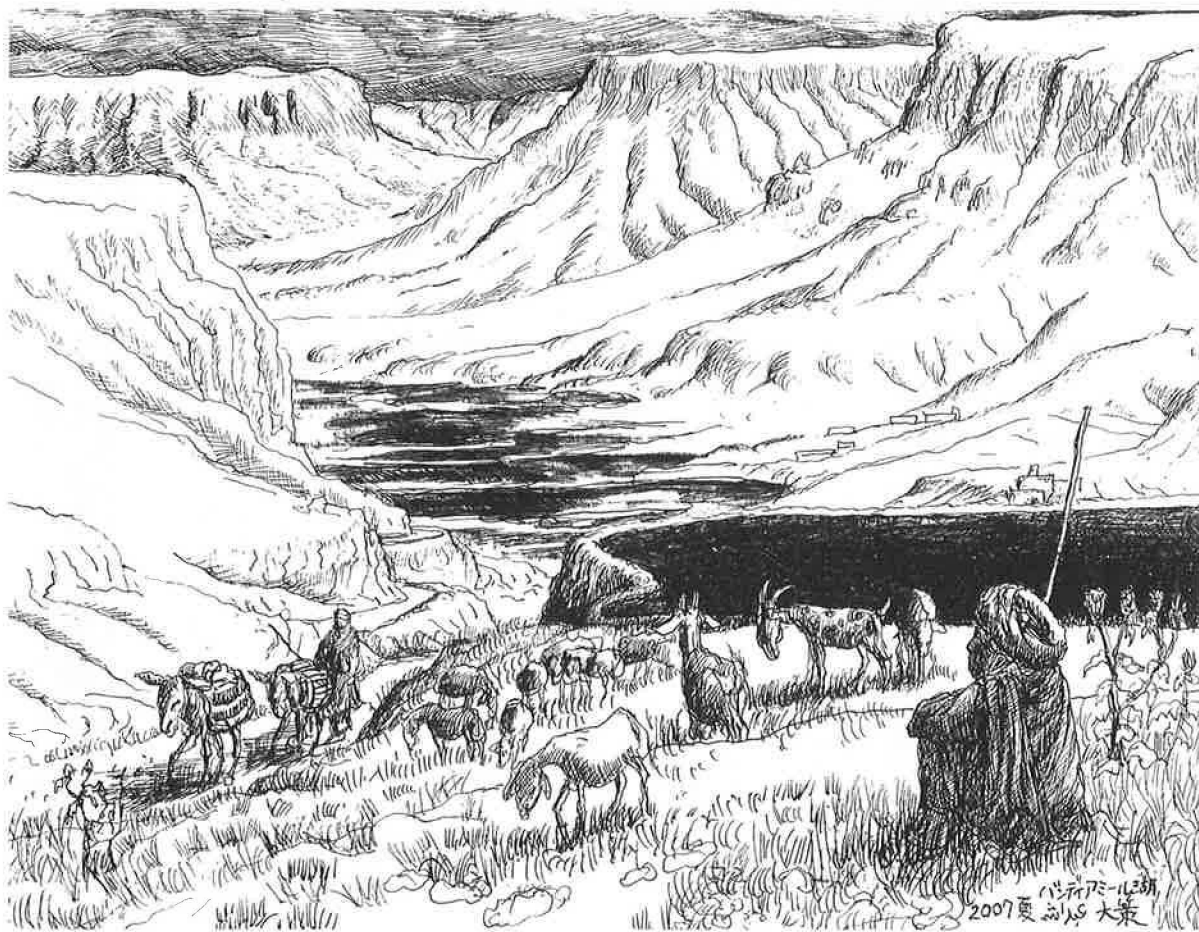
ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.92

2007年6月27日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵 バンディアミール湖 (画・甲斐大策)

悪化する難民情勢の中、活動の原点を固守

中村 哲

2006年度会計報告

ペシャワール会事務局

黄金色の麦畑に映える用水路に感動

後藤哲也

農業計画報告 地域農家に試験成果を普及する段階へ

伊藤和也・進藤陽一郎・高橋修

四度目の夏、四度目の水路改修

鬼木 稔

アフガンの「ムーミン」

近藤真一

英語力のある新人技師に期待しています

坂尾美知子

パシャイー語も徐々に習得

竹内英允

砂漠だった四年前が想像できない光景でした

野田智子

用水路よ、永遠に！

藤野洋子

ワーカー〇B報告④現地での経験を地域医療に生かしています

小林 晃

ペシャワール会は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

悪化する難民情勢の中、活動の原点を固守

用水路は第2期6.8キロメートルの工事を開始

2003年3月に着工した全長13キロメートルの用水路は、2007年4月、4年の歳月をかけて第1期工事を完了した。…重要な点は、建設の主力が周辺農民であったことである。4年間で約38万人が働き、600トンのワイヤーで蛇籠1万6000個を生産・使用したのも彼らであった。水路が必要とされる限り、現地で改修できるのは彼ら自身である。…これが可能になったのは、過去3年をかけて培ってきた現地・日本人職員たちの実戦的経験、作業員であった周辺農民の労働力の質の向上、そしてこれを物心共に支え続けてきた日本側の並々ならぬ努力である。

PMS (ベシャワール会ジャパン・医療サービス) 総院長 中村 哲

2006年度を振り返って

皆さん、お元気でしょうか。

いつもの暑い暑い夏がやってきました。この一年をふりかえると、随分と多くのことがありました。政情も、事業も、何から報告していいか分かりませんが、今年度は報告書をきちんとまとめるといって、細かな点は次の会報で補いたいと存じます。

* * *

ベシャワール会の現地活動は、今年六月を以て、二四年目に入った。毎年、報告書を書くこととすれば、「激動」だの、「流動的情勢」だのという表現がやたらに多い。気がつく、動いていたのは周りの方で、私たちが努力してきたのは、いつも出発点に帰ることであった。換言すれば、時代遅れになったということだ。また、国際的でもない。知るのは九州とアフガン東部だけである。それでも難儀しているのだから、優れて地域的な骨董品だと云える。この四年間、用水路工事で河との戦いを通じて、特にそう思った。

だが骨董品といえども、バカにはできない。日本の古い水利施設を見ていると、過去は現在を知る無尽蔵の宝庫である。真似て良くないこともあるが、徒らに進歩や改革を繰り返して失うことも多い。何だか目まぐるしくな



すっかり根づいて緑の蔭を落とす護岸の柳

るばかりで、本来私たちが持っていた寛容さ、律儀さ、自然との同居の知恵、人間らしさが退化しているようにさえ思われる。

「テロとの戦い」に拳を振り上げ、殺戮を繰り返すことが「進歩」だとは思わない。景気回復で貧富の差を増し、華美と精神の貧困が蔓延することが「改革」だとは信じない。この進歩改革の妖怪が、普遍的な真理のごとく、「世界の骨董国・アフガニスタン」に來襲して多くの血を流し、人々を追い詰めたのであ



用水路の完成セレモニーで重機を操る中村医師

る。

戦を語り、政情を語ることに疲れてきた。時代の流れに乗るのは、なおさら疲れる。変わらぬものは変わらないし、虚構は一時的に力を振るっても、長くは続かないからだ。

異国の人々がやってきて、改革を叫んでは血が流れ、評論と虚偽がはびこり、そして去ってゆく。しかし、確たる事実は、彼らが何を守ろうとしているのか不明だが、我々には守るべき人間としての営みがあることである。

敢えて信念らしきものがあるとすれば、これに尽きる。私たちの活動をささえるものは、それ以上でもそれ以下でもない。

○七年度も、なおさら変わらず、仕事を続けて行きたい。

2006年度の概況

○六年度は、戦火の拡大で始まり、アフガン難民の強制帰還の動きで締めくくられた。反政府勢力の勢いは増しており、○七年六月現在、増強を続ける欧米軍兵力は四万数千名、アフガン復興が始まった二〇〇二年の一万二千に比べ、約三倍以上である。主に東部・南部で戦闘が激しく、クナル、パクティヤ、パクティカ、カンダハル、ザール、ヘラートなどの各県を併せると、毎日数十名から数百名が死亡している。

現在、我々にとって最も危険なのはカーブル市内で、欧米軍に近寄るのは危険である。最近の傾向は、欧米軍および（その協力者と取られ得る）諸外国NGOに反政府側の攻撃が集中しており、組織化された動きが目立つようになった。権力闘争だけでなく、麻薬に絡む犯罪、急激な欧化政策に反発する勢力、貧困層の急増に伴う強盗、部族間の反目、これらが一体となって治安は悪化の一途をたどっている。

○六年は、これにパキスタン側の大きな動きが加わり、情勢が更に混沌としてきた。ベシャワールで爆破事件が相次ぐようになり、国境ではアフガン軍とパキスタン軍が衝突、北西辺境州全体が、アフガニスタンと共に揺らいでいる。この背景は、

一、アフガン難民の強制帰還措置。パキスタン政府は、一〇年以上前から進めてきた「帰還計画」を一挙に実行、北西辺境州の全難民キャンプを閉鎖、難民を対象にした教育・医療施設も活動停止させようとしている。三〇〇万人といわれるアフガン難民の中でも、貧困層が大部分で、二〇〇〇年以降に発生した大旱魃で逃れた「出稼ぎ難民」が多い。帰還しても生活が保障されない状態である。

二、それまでタブー視されてきた北西辺境州「部族自治区」に、米軍と協力してパキスタン国軍が兵を進め、自治区住民が反旗を翻したこと。○六年秋、バジヨワールでは、「テロリスト攻撃」と称する米国による誤爆でモスクが空爆され、八〇名の死者を出した。このような事件は珍しくなくなっている。

三、米軍に協力する政権に対して、パキスタンの一般庶民に反感が拡大していること。
○六年には政権の膝元であるパンジヤープ州で暴動があり、政府を震撼させた。



PMS本院に入院中のアフガン難民の患者さん母子（右は藤田院長代理）

我々の事業も、この動きに振り回された。ことに、「難民強制帰還政策」が性急に進められた余波を受け、「難民診療機関」と目されるPMS（ベシャワール会医療サービス）基地病院も、閉鎖に追い込まれる可能性が出てきた。二〇〇七年四月、PMSの現地法人としての問題や医師・看護師の資格問題を問いただす文書が、期限付きでパキスタン政府から突然出され、現在善後策の処理に追いまわされている（詳細は次号で報告）。

しかし、医療事業を除けば、アフガン内の「緑の大地計画」は大きく進展した。「マルワリード（真珠）用水路」は第一期一三キロメートルの工事を完了、第二期七キロメートルの着工が開始された。井戸事業では、二〇〇七年四月に一五〇ヶ所を突破した。農業計画では、主食のひとつであるコメの作付け、飼料の改善など地道な努力が続けられている。しかし、二〇〇六年度の用水路第一期工事は、二年分の精力と予算をつぎ込んで行われた総力戦であったが、二〇〇七年度に起き得る大混乱と早魃の進行を念頭に強行したものである。今後、不測の事態を考慮しながら動かざるを得ない状態が続くと思われる。

06年度事業報告及び07年度の計画

1. 医療事業

先述の政情の変化を直接受けて、活動がやりにくくなった。それでも、〇六年度はPMS基地病院を中心に、ラシュト診療所、ダラエ・ヌール診療所で八七、四六七名（うち外来数八一、七七〇名、のべ外傷治療数四、七九七名、入院治療数九〇〇名）が診療された（表2）。二〇〇七年四月に出されたパキスタン政府からの要求は、事実上閉鎖を要求する

もので、アフガン人医療関係者の活動が封ぜられるものであった。この背景には、米国からの圧力を受けるパキスタンの苦悩がある。性急な「強制帰還」、難民福祉事業の廃止、リスクの高い賭けである。アフガン政府にとっても、行き場のない貧困層を抱えることは、大きな爆薬庫を抱えることになった。同じ行政でも、北西辺境州と中央政府との間には、大きな温度差がある。今後どうなるか分からないが、困るのは患者たちであって、粘り強く対処してゆきたい。

2. 水源事業

①用水路建設

二〇〇三年三月に着工した全長一三キロメートルの用水路は、二〇〇七年四月、四年の歳月をかけて第一期工事を完了した。連続して第二期六・八キロメートルの工事に入り、早ければ一年、遅くとも二年以内に完了する。二〇〇六年度は、翌年夏に予測された戦火の拡大、早魃の進行を念頭に、強行軍で進められた。土石流の谷グラエ・ヌール渓谷二・五キロメートルの通過だけでなく、取水口の最終的な大改修、河道の変化で崩壊に瀕した四・五キロメートル地点の湿地帯処理、一・三キロメートル地点の護岸と、三つの大規模工事を並行して短期間に終えた。

最大許容送水量は毎秒四〜五トン（一日約

五〇万トン)、今やマルワリード用水路は直接灌漑地(沙漠化から回復)が約九〇〇町歩以上、冬の渇水期に送水できる既存の隣接用水路の面積を加えると、数千町歩になる。多くの旱魃難民が帰農し、廃墟となった村々が復活した。今後、第二期工事が進展するに従い、直接灌漑される地域は飛躍的に拡大してゆくと思われる。

用水路は大幅に日本の伝統技術が取り入れられた。全区間にわたって柳枝工と蛇籠工で造成され、一一の水門、七つのサイフォン、水路沿いの植樹が一二万五千本、三つの貯水池を擁する堂々たるものとなった。四回の夏を経て、土石流、洪水、土砂崩れによる決壊に何回も遭遇、工事の半分以上が「水路保護」に費やされ、河との戦いでもあった。ニンガラハル州北部農村の守護神として長く機能するだろう。

重要な点は、建設の主力が周辺農民であったことである。四年間でのべ三八万人が働き、六〇〇トンのワイヤーで蛇籠(じよむか)一万六千個を生産・使用したのも彼らであった。水路が必要とされる限り、現地の彼ら自身で改修できる。

これが可能になったのは、過去三年をかけて培ってきた現地・日本人職員たちの実戦的経験、作業員であった周辺農民の労働力の質の向上、そしてこれを物心共に支え続けてきた日本側の並々な努力である。水路第一

期工事の詳細は別表に譲る。

②井戸事業

二〇〇七年四月に飲料水源は一五〇〇ヶ所を超えた。しかし、地下水の下降は依然として続いており、今後も努力が必要である。二〇〇六年度で特筆すべきは、トルハム国境の四基目のボーリング井戸が完成、渇水地獄は解消しつつある。しかし、他地域では水源事業が始まった頃よりもひどい状態が続いている。

二〇〇六年度は、主に用水路沿い、公共性の高い場所を選んで仕事が進められた。詳細は井戸担当者の報告に譲る。

今後、井戸事業は継続されるが、用水路事業と一体となり、ため池の造成、汲み上げ用水路などの事業も進めることになる。

3. 農業計画

二〇〇六年度は、サツマイモの普及、冬の飼料の確保、日本米の導入などで大きな努力が払われた。茶の生産も、栽培地をグラエ・ヌール溪谷高地に移してから希望が見え始めている。詳細は、農業担当者の報告に譲る。

4. ワーカー派遣

以下(表6)のワーカーが事業に参加した。今後は長期継続を考え、一定人員を育成しつつ、派遣することが求められている。しかし、

他方で情勢が流動的ななか、特に医療事業で困難が続いている。

5. 二〇〇七年度計画

用水路は第二期工事を出来るだけ早期に完了する。他の事業も基本的にこれまでの仕事の連続である。医療事業については、現在計画を立て得る状態ではない。

中村哲(なかむらてつ) 九州大学医学部卒。専門Ⅱ神経内科(現地では内科・外科もこなす)。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二十年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保(井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千四百ヶ所以上)事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、二〇〇三年春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約九万人(二〇〇五年度)。

表1

用水路の概要

水路の名称 マルワリード用水路 (Marwarid Canal, Marwarid はペルシャ語で「真珠」の意)
 全長 13.0 km
 場所 アフガニスタン国クナール州ジャリババからナンガルハル州シェイワ郡ブディアライ村まで
 平均傾斜 0.00069
 標高差(落差) 9.1m (取水口633.5 m, ブディアライ村末端624.4 m)
 取水量 4.5~5.5 m³/sec. (限界最大量6.0m³)
 推定損失水量 30% (浸透損失20%、無効水10%)
 灌漑給水能力 4~5 m³/sec. (500,000 m³/day)
 推定灌漑可能面積 約9,700ヘクタール(約9,700町歩) *
 *既に灌漑している耕地と給水量から算出。土壌の保水性、作付けの相違で、日本の基準とは必ずしも一致しない。
 水路沿い植樹総数 125,500本
 設計・施工者 PMS (ペシャワール会医療サービス)
 工期(第一期工事) 2003年3月19日~2007年3月31日

各区別概要(流量・工種など)

部位	長さ(m)	開水路幅(上部)	平均傾斜	通常流量 5.0 m ³ /sec.の時				コンクリート構造物			工種と主な付帯工事
				水深(m)	流量(m ³ /s)	流速(m/s)	流量(m ³ /s)	橋	依道	水門	
A区域	800	40~50m	0.00125	0.84	3.53	1.4	5.00	1		1	砂礫層の掘削、蛇籠工と構架工で護岸、土石流に対して横断暗渠
B	100										岩盤掘削
C	700							1			一部埋立・岩盤掘削の上、蛇籠工と構架工で護岸(一部空石積み)
D	750	100~150m	0.00045	0.63	6.28	0.8	5.00			1	築堤による泥沙堆積造成、護岸は空石積み・覆工、流量調節水門、水路部は岩盤掘削
E	1,416	60~100m	0.00070	0.81	4.85	1.0	5.00	2	1		ローム層の掘削、蛇籠工・構架工で護岸、ソイルセメント・ライニング、流れ川横断に水道橋、暗渠各1
F	610	55~100m	0.00080	0.74	4.05	1.2	5.00	1			窪地に盛土して掘削、蛇籠工と構架工で護岸、ソイルセメント・ライニング、滲出水処理の工事
G	400		0.00080						1	1	
H	2,411	60~100m	0.00034	0.85~0.93	6.0~6.6	0.9~1.0	5.00	2		2	単純掘削、空石積みで護岸、前面部土手は砕石積みで造成、土石流に対して末端に排水地設置
I	3,000		0.00045	0.67~0.71	4.7~5.0	1.1~1.3	5.00		1	1	土手の造成、水路内と外壁共に空石積み、ソイルセメント・ライニング、土石流に対してサイフォン (30m)
J	1,400	55~65m	0.00104	0.76	4.10	1.2	5.00	1	2	2	砂礫層の掘削、ソイルセメント・ライニング、蛇籠工・構架工で護岸、
K	1,430							2	2	3	土石流に対してサイフォン部4箇所(計300m)
合計	13,017							10	5	7	9

水門の概要

場所	目的	方式	サイズ(水門幅・個数)	通常通過流量 (m ³ /秒)	備考
取水口	取水調整	手動・堰板式	幅1500mmx3	4.5~5.5	
D区域	流量調節と渡渉	手動・堰板式	幅2000mmx4	4.5~5.5	渡渉用1(緊急排水量; 毎秒15m ³ 以上)
G区域	灌漑路へ分水	手動スライド式	幅600mmx1	0.2~0.3	G分水路の水量調節
H1区域	灌漑路へ分水	手動スライド式	幅600mmx1	0.1~0.2	H1分水路の水量調節
H2区域①	流量調節	手動スライド式	幅1500mmx2	4.5~5.5	同時に橋としても使用
H2区域②	灌漑路へ分水	手動スライド式	幅600mmx1	0.1~0.2	過水期にシェイワ用水路に給水(1.5~2.0m ³ /秒)
I2区域	灌漑路へ分水	手動スライド式	幅700mmx1	0.1~0.3	I2分水路の水量調節
J1区域①	流量調節	手動スライド式	幅1500mmx3	4.5~5.5	
J1区域②	分水および排水	手動スライド式	幅500mmx2	0.2~0.3	I分水路の水量調節、シギ水路への送水
K区域①	緊急排水	手動スライド式	幅1500mmx1	-	全開で水深1m5.0、水深1.5m8.4
K区域②	灌漑路へ分水	手動スライド式	幅500mmx1	0.1~0.2	

サイフォンの概要

場所	橋断地	長さ(m)	管径(mm)	流積(m ³)	傾斜	最大許容流量(m ³ /秒)
G区域	4.8km地点の道路	10	1800x2000	3.6	0.01250	20.4
I区域	8.6km地点の谷	20	1800x2000	3.6	0.00500	12.9
J区域①	10.3km地点の道路	30	1800x2000	3.6	0.00500	12.9
J区域②	10.9km地点の河道(グラズネル)	120	1800x2000	3.6	0.00250	9.1
K区域①	11.6km地点の河道(グラズネル)	120	1800x2000	3.6	0.00333	10.5
K区域②	11.7km地点の河道(グラズネル)	30	1800x2000	3.6	0.00333	10.5
K区域③	11.8km地点の河道(グラズネル)	30	1800x2000	3.6	0.00333	10.5

クナール河の護岸・堤防工事など

場所	構造物	長さ	幅	工種の概要
取水口	堰	220m	50m	巨石による川道全体の堰上げ、対岸の護岸工事
C区	護岸	160m	法面下部10m以上	洗掘防止策、捨石工及び蛇籠工
D区	護岸	300m	-	洗掘防止策、捨石工による石出し水刺3基(各70m)を設置、川道中心を道路から約75m遠ざけて護岸。
F G区	盛土	1000m	上段15m, 下段50m	高さ12~17m、縦断敷荷、サンドマット工法で湿地帯の上に盛り土して交通性を確保、清水層を遠ざけて排水
F G区	護岸	-	-	洗掘防止策、長さ100~140mの石出し水刺3基を設置、水路に沿ってくる川道を200~400m遠ざけて護岸。

造成分水路

場所	長さ(m)	最大許容流量(m ³ ・秒)	推定灌漑面積(ha)	排水先	村の地名
G分水路	2500	0.3	300	シェイワ水路	スランブール、カンディ、シェトラウ、ブディアライの一部
H1分水路	500	0.3	70	シェイワ水路	スランブール
H2分水路	400	1.5~2.0	180	シェイワ水路	スランブール、ブディアライの一部
I2分水路	300	0.3	50	シェイワ水路	
J分水路	3000	0.3	200	シェイワ水路	ブディアライ村下流
K分水路	400	0.3	100	シェイワ水路	ブディアライ村下流
計	7100		800		

その他の構造物

種類	長さ(m)	幅(m)	許容流量(m ³ /秒)	概要
A区 橋	8m	16m	-	ジャリババ谷の土石流対策で設けた暗渠
C区 橋	8m	8m	-	交通路(国道)
D区 溜池	約330m	約350m	-	花砂池、および水証の安定化と調整
E区 水道橋	15m	内径2.9m	1.75	流れ川の谷を横断。
E区 橋	8m	10m	-	交通路(国道)
H区 橋	10m	17m	-	交通路
H区 排水地	200m	30~80m	-	掘削池と窪地、谷の上流側に樹林帯で土石流の緩化
K区 橋	8m	7m	-	交通路
K区 橋	8m	7m	-	交通路
K区 水道橋	20m	内径0.5m	0.32	建設される前にあった灌漑用分水路のマルワリード水路橋。4ヶ所に設置。
K区 池	400m	150-200m	-	水量調節、K分水路へ流流

植樹数(2007年3月現在)

樹木	場所	目的	本数
コリヤナギ	全開水路内裏、盛土法尻	①用水路護岸の強化、②法止め	116,050
タワ	盛土法尻	法止め工	4,625
オリーブ	盛土法尻	法止め工	2,000
ユーカリ	土石流の谷	土石流の緩化(保樹樹林)	2,251
アズ	D区花砂池周辺	果樹園造成	600
計			125,526

表2 各診療所の主な診療内訳

	外来数	外傷治療数	入院数
PMS基地病院	38,837	3,451	900
ラシュト診療所	5,464	223	-
ダラエ・ヌール診療所	37,469	1,123	-
Total	81,770	4,797	900

表3 PMS病院検査数の内訳

血液	2,476	心電図	478
尿	2,915	超音波断層写真	1,901
便	1,652	心エコー	0
らい菌塗抹検査	98	細菌	0
抗酸性桿菌	381	体液(唾液・胸腹水等)	5
マラリア血液フィルム	1,590	その他	1,559
リーシュマニア	98	内視鏡	167
生化学	1,648	病理組織検査	0
レントゲン	2880	小計	17,848

表4 水源確保事業の現状

() 内は完成した井戸・修復したカレズの数

第I期井戸事業(2006年4月15日現在)

	飲料井戸	灌漑井戸	カレズ	計
ダラエヌール	395(395)	11(11)	38(38)	444(444)
ソルフロッド部	542(542)			542(542)
ロダト部	263(263)			263(263)
カイバル峠	4(4)			4(4)
アチン部	171(171)			171(171)
スタッフ用	20(20)			20(20)
その他	17(17)			17(17)
合計	1412(1412)	11(11)	38(38)	1461(1461)

第II期井戸事業(2007年5月31日現在)

	飲料井戸	灌漑井戸	カレズ	計
ジャララバード	7(7)	0	0	7(7)
ソルフロッド部	14(12)	0	0	14(12)
ダラエヌール	3(3)	0	0	3(3)
シェイワ部	14(14)	0	0	14(14)
カマ部	2(2)	0	0	2(2)
トルハム	1(0)	0	0	1(0)
その他	1(1)	0	0	1(1)
合計	42(39)	0	0	42(39)

表6 現地派遣ワーカー

氏名	職種	派遣開始	現在	氏名	職種	派遣開始	現在
◎医療				16 横山尚佑	用水路	2005年9月	継続中
1 藤田千代子	院長代理・看護部長	1991年9月	継続中	17 木藪健児	用水路	2006年5月	2007年5月終了
2 坂尾美知子	臨床検査技師	2002年7月	継続中	18 荒野一夫	炊事担当	2006年6月	2007年3月終了
3 紺野道寛	ダラエヌール診療所	2003年7月	2006年9月終了	19 蓮岡 修	用水路	2006年8月	2007年6月終了
4 杉山大二郎	事務	2005年2月	継続中	20 西 和泉	支部会計	2006年9月	2007年6月終了
5 村井光義	会計	2005年3月	継続中	21 長橋 努	用水路	2006年12月	2007年5月終了
6 河本定子	薬局	2005年9月	継続中	22 神代大輔	用水路	2007年2月	継続中
7 竹内英允	ダラエ・ヌール診療所	2006年4月	継続中	23 西山浩司	炊事担当	2007年3月	継続中
◎灌漑用水路建設計画・農業計画				24 山口敦史	用水路	2007年3月	継続中
8 近藤真一	用水路	2003年1月	継続中	◎定期・短期派遣者			
9 伊藤和也	農業	2003年12月	継続中	25 高橋 修	農業顧問	2002年3月	定期
10 本田潤一郎	用水路	2004年1月	継続中	26 石橋忠明	用水路	2003年12月	定期
11 松永貴明	用水路	2004年4月	継続中	◎2007年度新規ワーカー			
12 進藤陽一郎	農業	2004年5月	継続中	27 佐々木啓泰	用水路	2007年4月	継続中
13 神戸秀樹	用水路	2004年5月	2006年5月終了	28 梅本壹邦	用水路	2007年5月	継続中
14 鬼水 稔	用水路	2004年5月	継続中	29 石橋周一	用水路	2007年5月	継続中
15 芹澤誠治	事務	2005年4月	継続中	30 西野恭平	PMS医師	2007年5月	継続中

表5 各診療所の診療数と検査件数の内訳

国名	パキスタン		アフガニスタン
	ベシワール	ラシュト	北東部山岳地帯
地域名	PMS	ラシュト	ダラエ・ヌール
病院・診療所名	PMS	ラシュト	ダラエ・ヌール
外来患者総数	38,837	5,464	37,469
(内訳) 一般	37,829	5,444	37,470
ハンセン病	38	0	0
てんかん	689	12	299
結核	241	1	0
マラリア	130	7	1,690
入院患者総数	900	-	-
(内訳) ハンセン病	111	-	-
ハンセン病以外	789	-	-
外傷治療総数	3,451	223	1,123
手術実施数	7	-	-
検査総数	17,848	-	4,702
(内訳) 血液一般	2,476	-	239
尿	2,915	-	694
便	1,652	-	714
抗酸性桿菌	381	-	1
マラリア	1,688	-	2,839
リーシュマニア	-	-	-
その他	8,736	-	182
リハビリテーション実施総数	4,937	-	-
サンダル・ワークショップ販売総数	15	-	-

2006年度の主な収支

寄付を頂きました団体の御名前につきましては紙面の都合上、割愛させていただきます。

期間 2006年4月～2007年3月

一般会計 (単位:円)

[収入の部]

1 会費・寄付	280,345,535 ①
2 補助金等	0
3 利息雑収入	29,324
4 その他収入	496,023
5 基金繰入	50,000,000
年度収入計	330,870,882
前年度繰越	32,656,008 ②
収入計	363,526,890

[支出の部]

1 現地協力費	342,862,962
うちPMS運営費	51,733,620 ③
井戸掘り事業	3,754,556 ④
農業支援事業	1,335,404 ⑤
灌漑用水路	255,006,071 ⑥
アフガン事務所	6,415,218 ⑦
現地ワーカー費	12,141,719 ⑧
渡航費	8,203,674
国内活動費	4,272,700
2 広報費	5,743,064
3 事務局費	9,920,139
4 収益事業	341,280
年度支出計	358,867,445
次年度繰越	4,659,445
支出計	363,526,890

収益事業会計

[収入の部]

書籍売上	773,585
ビデオ売上	22,000
雑収入	1,036,875
売上収入計	1,832,460

[経費の部]

書籍原価	670,840
雑費	567,000
送料等経費	10,500
租税公課	925,400 ⑨
経費合計	2,173,740
前期繰越損失	
当期収益(一般会計繰入)	-341,280

「いのちの基金」残高

期首残高	500,000,000
一般会計へ繰入	50,000,000
期末残高	450,000,000

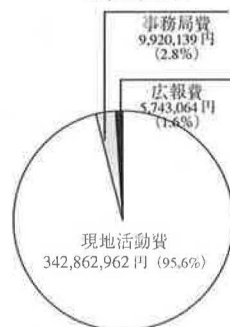
未使用切手、書き損じ葉書の寄付	
寄付いただいた件数	1,059件
未使用切手枚数	47,682枚
同 金額	3,810,656円相当
書き損じ葉書枚数	37,765枚
同 金額	1,852,673円相当
合計金額	5,663,329円相当

* 会報発送費用等の節約になっています。

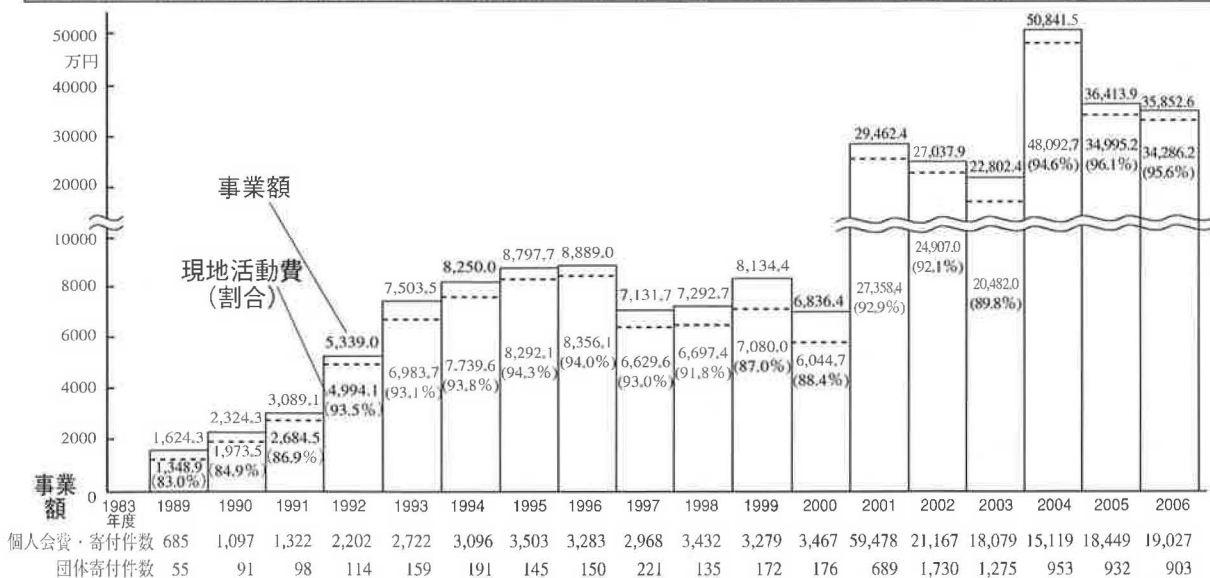
- ① 個人会費寄付 19,027件、団体 903件
- ② 「いのちの基金」から繰入
- ③ パキスタン、アフガン、スタン、診療所
- ④ 飲み水等供給事業
- ⑤ 作物育成試験等
- ⑥ 農業用灌漑用水路建設
- ⑦ ジャラバード事務所
- ⑧ 日本人ワーカー費
- ⑨ 平成十七年度法人事業税及び十八年度源泉所得税(印税分)

06年度会計報告

● 2006年度事業額 (支出ベース)
358,526,165円



事業規模(寄付件数・事業額)の推移 1983~2006(年度)



◎アーベ・マルワリード水路第二期工事完成式典に出席して 黄金色の麦畑に映える用水路に感動

ペシャワール会会長 後藤哲也

二〇〇七年四月二十三日アーベ・マルワリード水路第一期工事の最終地点K-貯水池が満たされ、その脇の仮設テントで午前十時から完成式典が催されました。式典は地域住民を含むおよそ三百人が参加し、中村哲医師、ニングラハル州知事、私の順で挨拶を行い、次いで政府関係の灌漑省、経済省、農業省、地域担当省の各省長の祝辞があり、最後に地域住民代表の謝辞が述べられました。

テント周囲には多くの近隣の住民が集まり、同時に多くのガードマンが銃を両手に抱えて警護に当たっておりました。政府の要人には更にまた数人の警備が付くので、その物々しさにはびっくりさせられましたが、我々の日本人ワーカーも単独行動は許されない治安の悪さをここで垣間見た思いがしました。

式典は次いでテントを出てK-貯水池の出口に向かい、第二期工事のテーパーカットと鍬入れ式が行われました。笛と太鼓の楽隊が陽気にリズムを刻みます。ここで中村哲医師の

シヨベルカーによる鉄入れ式というビッグ・サプライズが演出され、皆のど肝を抜きました。シヨベルで土を掘りダンプに移し、おまけにシヨベルのアームを空中高く二回転させるというアトラクションです。次にシヨベルを地上に降ろすと、今度は住民三人をシヨベルに乗せ持ち上げ、静かに上空を二回転させ、皆の喝采を浴びました。それが終わるとさすが土地の老人が音楽に合わせてアフガニスタンの民族舞踊を始めました。それに一人従い二人従いと順次踊りの輪が益踊りのように広がり、私も踊りの輪に押し込まれました。阿波踊りを勇壮にしたような美しい踊りでした。人の群が手拍子を打ち手を打ち鳴らし、大いに盛り上がり、無事式典が終了しました。その後政府要人達は中村医師と水路の見学に向かわれたのでした。

さて、日本からは事務局長の福元、綱脇、井上の各氏、野田さん、藤野さん、私の計六名、タイ航空で四月十八日現地に入りましたがイ

スラムバード空港からペシャワールPMS病院まで車で約四時間、日本時間で言う午前二時から六時というのはやはりハードなものを感じ、ここを行ったり来たりされる中村医師の苦勞が偲ばれました。PMS病院ではジア副院長について二回、回診を見学しましたが、うつ状態の中年女性の患者さんに覚えたてのパシユトン語で「エステハー ハアデイ？」（食欲はいいですか？）と尋ねたところ一瞬の間をおいてストールで口を隠しながら



水路完成式典で祝辞を述べる後藤会長



用水路の取水口。例年より早い増水期を迎えたクナル川の奔流

医師を先頭とする現地の人々が成し遂げた偉業であり、我々ベシヤワール会会員の志が結実したものだと思ふ。深く感じ入った次第です。

最後に、式典で私が行った挨拶をここに掲載します。ニューヨーク在住の沢田裕子さんがすばらしい英語に訳して下さい、その英語をアフガニスタンのヌール・ザマン氏がパシユトン語に訳してくれました。いつも沢田さんにはアフガン情報の翻訳などお世話になっていますが、この場を借りて心より感謝申し上げます。

「アーベ・マルワリード用水路

第一期工事完成を祝して」

皆様こんにちは。

私は日本ベシヤワール会会長の後藤哲也です。同行者は日本ベシヤワール会事務局長代行の福元満治氏はじめ事務局ボランティアの方々です。よろしくお願い致します。

本日はアーベ・マルワリード用水路第一期工事全長十三キロメートルの完成おめでとうございます。二〇〇三年三月十九日に起工式が行われて以来丸四年、中村哲医師の強い指導の下、日本人ワーカー、当地の多数の作業員の並々ならぬご努力、更には本日ご列席の皆さまのご協力ご厚意により、大きな事故もなく本日の完成式を迎えられたことは誠に喜ばしい事と、心よりお祝いを申し上げます、同

時に感謝申し上げます。二〇〇〇年春に始まった中央アジアの大旱魃^{かんばつ}は当地アフガニスタンにもっとも大きな被害を与え、ここでは飲料水や灌漑用水の確保が何よりも大切であるという中村哲医師のアピールが、日本人の心を強く捉え、多くの浄財が寄せられて、この事業を完成に導いてくれました。

それにしても、医師である中村哲先生が土建業者のように井戸を掘り、挙句^{あげく}の果てには用水路まで掘るといいますから、日本ではとても信じられないことだと大評判になったことは皆様にご報告申し上げねばと思います。病氣は後でも治せる、まず命だ、まず水だという中村哲先生のアピールは、ふんだんな水に恵まれた日本人には気づきにくい所を気づかせてくれました。

日本の伝統工法を取り入れた取水口、アフガニスタン伝統の石組みを用いた堤防、柳を植えた護岸、サイフォンを応用した土石流対策は昨年からの二度の水害を何とか乗り越え持ちこたえました。今後はこのアーベ・マルワリード用水路が地域の皆様の生活の一部として、あたかも百年前からそこに存在していたかのように、緑なす田園とともに存在し続けることを祈念し、私の挨拶とさせて頂きます。今までのこの事業に関わって頂いた皆様には本当にご苦労さまでした。心よりお礼申し上げます。有難うございました。

ら「ふっふっふ」と笑ってくれたのが印象的でした。また、外来で下痢を訴える子供を父親が連れてきて私が「タバ シュタ？」（熱ある？）と質問したら若いドクターが即座に検温し、三六・九度だったので「ニシタ」（ない）と答えると父親がにっこり笑ったのも忘れられません。

アフガニスタンの水路については、一面黄金色の麦畑が乾燥した空気の中に際立ち、その存在を誇らしげに示していました。それが中村

◎二〇〇六年度 農業計画報告 地域農家に試験成果を普及する段階へ

農業計画現地担当

伊藤和也・進藤陽一郎

農業指導員

高橋 修

私達は過去五年間、試験農場で作物・技術を研究してきましたが、昨年からその成果を農家へ普及する段階へ踏み出しました。感慨を含めながら概要を報告します。

人気者の「サチユマイモ」

まず甘藷（サツマイモ）は、課題であった冬季の種芋貯蔵が九割以上の保存率で成功し、また育苗も成功し、現在周辺農家二三百戸が試験農場から配布した苗を使って栽培を始めました。甘藷に対する周辺農家の関心が高いため、栽培農家も私たちも緊張しながら管理を進めています。

四年前に初めてサツマイモを導入した時、「この赤い芋はサチユマイモ（？）と言うらしい」と訝しげな顔をしていた試験農場担当農家も、今では他の農家に対し栽培の全般にわたって自信に満ちた指導をしてくれるようになりました。彼らが普及の主役になってくれる事は、私達と一緒に試行錯誤してきた成果であり、本当に嬉しい収穫です。

日本米の多収に驚きの声

水稻（日本米）も本格的に普及段階へ発展しました。現在、新しく掘削されたキャナル（用水路）流域の農家も含めて五五戸の農家が日本米の栽培を開始しています。

日本米に対する関心が高い理由は、過去二年間、一〇アール（一千平米）六〇〇キログラム前後の記録的な高収量で、かつ現地品種の二倍近い収量であったことです。更に今年には春先の降雨に恵まれた事も幸いしています。内緒ですが、これで私達日本人も一年間、毎日美味しい日本米が食べられると楽しみにしています。

今年、日本米栽培の難点である高温による碎米の発生を防ぐため、現地の慣例より遅播きし、また直射日光に当て過ぎない乾燥方法を工夫していきます。

大豆も小麦もソバも

「島の肉」と称され栄養価が高い大豆も、今

年二〇戸の希望農家で栽培されることになりました。インドネシアから導入した品種は乾燥や高温に強く、栽培技術も勘所がつかめ、安定的に高収量が得られるようになりました。懸案の調理法も、現地で日常的に食べている他の豆類と同じ炒り豆や豆料理として見通しがつき、今年の反響が期待されます。

主食のナンの原料である小麦の試験栽培は、適期播種、適期作業を着実にこなした結果、一〇アール（一千平米）当たり四一七キログ



塩炒り大豆をほおぼる現地の子供たち



番茶をつくる農場のスタッフ、モハマド

ラムという高い収量を上げることができました。この収量に我々自身はもちろん担当農家も周辺農家も驚いており、今年の秋は試験農場の栽培法をモデルとして多くの農家で改良技術が実践されると期待しています。

ソバは安定して高い収量が得られる技術が確立しました。ソバ粉はナンの原料として小麦粉と混ぜたりする他、塩炒りで食べたりビスケットやペースト状のお菓子の材料に使うなどの調理法が開発され徐々に親しまれてき

ました。私達はソバの真価は初秋からの七〇〜八〇日という短期間で収穫を得る事ができるその生育の早さ、つまり少ない灌水量と短い栽培期間で収穫できる作物・食糧である点にあると見ております。今年はこの可能性を具体化させるため、小麦の前作にソバを栽培し、農地の利用効率を最大限に高める作付試験を実施する計画です。

飼料の安定確保技術も普及段階へ

搾乳のみならず現金収入源ともなっている家畜用の飼料の確保も食用作物と並んで重要な命題です。すでにソルゴーとアルファルファは数戸の農家へ普及していますが、種子の希望に対して採種が追いつかず、今年はこの点を重要課題として頑張っていきます。

また冬季の餌としてエン麦が高収量と採種の容易さから普及に適していると判断し、農家からの種子の配布希望に応えて、一〇月からの普及用種子を相当量蓄えています。

同じく冬季の飼料を補うために試行を続けてきたサイレージ（秋に刈り取った飼料作物を密閉発酵する事で高い栄養分が保持される貯蔵飼料）は、簡便な素堀りの縦穴方式を含めて二年続けて成功しました。今年は人海戦術で、詰め込み材料を細かく切り刻む際に手動の押し切りを使い、一般農家が安い経費で実践できる方法を模索することとしています。

明るさが見えてきたお茶とブドウ

アフガンの生活に欠かせないお茶は、栽培開始から四年を経てなお悪戦苦闘が続いていますが、この春から農家と一緒に精製した番茶を日常的に飲めるようになり、「アフガンスタンでも茶の栽培は可能だ」と言える段階まで到達しました。これまでずっと課題として残っているアルカリ土壌の改良には、この地域で薬用として産出される硫化アルミニウムが有効であると分かりましたので、現在のこの鉱石を使って土壌改良の試験を実施中です。また今秋からは近隣農家の果樹園内で木陰を利用した茶栽培を試みる予定をしています。

将来の換金作物として導入したブドウは、昨年大きな房をつけ「やれひと安心」と思っていた矢先に、近隣の子供達にことごとく摘み取られ、幻のブドウとなった悔しさと将来の大悪党（？）への憎さで心が揺れ動きました。しかし気持ちを入れ替え、今年こそは優良品種に目途をつけ、来春までに挿し木育苗して配布・普及へと踏み出す計画です。

以上が過去一年間における農業計画の主な動きですが、PMSが投じた一石は必ず農家の自助努力で定着していくものと確信しています。今後とも私達は「主役は農家」をモットーとした協働の姿勢を貫いていきます。まだ先は長いですが、今後の私達と農家達の活動に温かいご支援を頂ければ幸いです。

*ワーカー通信

四度目の夏、
四度目の水路改修

灌漑用水路建設担当 鬼木 稔

早まる雪解け

四度目の夏が巡ってきた。

私にとって一番苦手な時期である。現場では摂氏五〇度を超える酷暑とも闘わねばならない。それは何度経験しても一向に慣れる気配が無い。

今年も例年を上廻る早さでクナール川の水位が上昇を続けている。これも地球温暖化の影響か？上流の源流域となるヒンズークシユ山脈の氷河が大量に溶け、気温の上昇に伴い、増水の時期が早まっているのかもしれない。

昨年の夏、大事をとって取水口の嵩上げ工事を完了した直後に思わぬ増水で、あわや危機一髪の所で難を免れた経緯があったばかりだが、今年も更に異常な水位の変化に再度、より高く取水口の嵩上げ工事を急ぐよう、日本より戻ってきた私に指令が待ち受けていた。

この工事と並行してやはり昨年、鉄砲水による

直撃を受け取水口の周辺が土石流で流されるといふ災害に襲われて、チヨキダール小屋（監視小屋）も崩壊、流出し、用水路が土石流に埋めつくされてしまう災難にも見舞われていた。

幸い取水口の本体自体は頑丈な構造物でビクともせず、また用水路も大量の土石を取り除いた後には蛇籠が元通りに姿を現し、期せずして先人達の技術の結晶が証明された出来事でもあった。

しかしその周辺には再度の災害に備え堤防を高く築いていたので、その除去と整地作業をしなければ資材搬入のトラックや重機類も入れない状態のままである。まずはローダー（ブルドーザー）で大量の土を、土石流で出来た爪跡の溝に埋め込む。

駐車場も元の広さぐらまで土砂を除去し、二日間を費やしてどうやら大型車が回転出来る程になり、作業ベースを取り戻すことが出来た。

取水口の嵩上げには鉄筋を入れ、更に四五センチ背を高くしたが、隣接する周辺の改修工事に手間が掛かる。

苦しみに比例して楽しみも

ここの地形は国道を挟んで、取水口の横から延びる奥深い谷が入り込んでおり、広い扇状地の付け根の部分に取水口は位置している。

普段は涸れ川の状態だが、谷の上流部で夏特有の局地的集中豪雨が降れば、保水性の無い岩山の

谷間を一気に鉄砲水となり流れ下ってくる。それでも自然に出来た涸れ川の流路は私達の建造物を守ってくれていたが、その後国道の舗装工事を請け負ったインドの会社が涸れ川を塞ぐように砕石置き場の山を築いてしまった。行く手を阻まれた土石流は進路を変え、私たちの用水路を襲った。いわば人災的要素による予期せぬ出来事であった。今は涸れ川の問題の箇所も既に修復工事は終わっているが、度重なる大いなる自然の力の前に予



用水路取水口の改修工事中の鬼木ワーカー

断は許されない。精根込めて作った物を再度作り直すことになり、多少の無念な思いはあったが、それでも当初から一緒に汗を流したメーソン（石工・左官）達と働いていると当時の思い出も甦り、楽しさも倍加する現場となった。

アフガンの「ムーミン」

灌漑用水路建設担当 近藤真一

普段は無口なおじさん

私の現場におもしろいおじさんがいる。名前はムーミン・ハーン。歳は彼曰く、五二、三歳だそうだ。私には四五、六歳ぐらいに見える。去年ブダイアラの現場作業が始まった一月頃からの付き合いだ。普段はおとなしく無口である。ひげ面が妙にかわいいおじさんだ。日本のアニメのムーミンが年をとってひげをはやすとこんな感じになるのだろうかとちよつと想像する。実際の彼の表情を見せられないのが残念だ。仕事態度は非常に波があり、今日はよく仕事をしているなあと思いきや、次の日には魂が抜けたかのごとく呆然と、ただ、ただ、突っ立っている。まあ、突っ立っているときの方が多いのだろうけれど。そんな彼をバカにするような人が時々いる

駐車場の二方を囲む二・五m程の高さの法面（斜面）は、前回のように石積みとする。あとはチョコキダール小屋の再建だが、その前にガンベリ一砂漠への扉となる、主水路の水門作りが待っている。次の課題を終えて、冬が来る前にはチョコキ

ダール小屋も建築するでしょう。こうやって一大プロジェクトが継続出来るのもペンジャール会々員の皆様や、多くの支援者の方々のお陰であり、感謝の念に堪えません。

が、彼はめげない。めげないと言うか、彼は果たして周りの人が話していることを聞いているのだろうかと思うことが時々ある。以前、コンクリートを猫車に積んで移動するときによつとした坂道があったのでムーミン・ハーンに、猫車を坂道のところで引つ張ってやつてくれと言った。一応彼はうなずき、坂道のところまで移動したのだが、猫車が次から次へと坂道のところに来ても彼はいつこうに手を貸そうとせずに、なにかこう、口をちょとあけて、中空を見つめて、じつと突っ立ち、機能停止。なんで私はこんな人と毎日仕事をしているのだろうと思いつつ、ムーミン・ハーン！ と呼ぶと、もそつと反応あり。

私を見つめて、何？ 何か用？ とでも言いたい様子。猫車を引け、と一喝。あ、そうそう、それと私が最初に彼へ伝えたことを今思い出したかのようには猫車を引き始めるのだが、何とも頼りなく、しまいには別の人が彼の代わりに猫車を引く始末。その横でムーミン・ハーンはまた中空に何かを見つけた様子。

「ガラム・ムサラ〜」

そんな彼も仕事をするときがある。いつぞや煉瓦積みの仕事で彼がモルタルを猫車で運んでいるとき

だった。ガラム・ムサラ！ ガラム・ムサラ！ ガラム・ムサラ〜！ ガラム・ムサラ〜！ ガラム・ムサラ〜！ ガラム・ムサラ〜！ と大きな声で叫びながらモルタルを運んでいた。あつちで、モルタル持ってきて来いという声が上がれば、あつちに行き。こつちでモルタル持ってきて来いと言う声が上がれば、こつちに来て。その時は誰よりも彼が一番仕事をしていた。それにしてもあの掛け声は何なのだろうか。ガラム・ムサラって、熱いモルタル？ つまり出来たてホカホカのモルタルと言うことか？

ブダイアラの仕事が終わり、私の仕事も規模を縮小するときに来た。今まで雇っていた人達を少しずつ少なくしていき、六〇人が四〇人に減り、四〇人が三〇人に減るときにムーミン・ハーンにも辞めてもらった。辞めてもらって一ヶ月ほど後に、他のエンジニアに雇われて仕事をしているところに再会。ここで働いているのか、そうか、良かったなと少し話して別れたとき最近会っていない。今頃、何処で何をしているのか。私の仕事も、もう少しで忙しくなるのでまた来て欲しいのだが。

そう言えば彼のひげは何だか黄色がかったような気がするんだけど、あれは何でなんだろう。記憶違いかな？ まあ、次にあったときにでも聞いてみようと思う。

英語力のある新人技師に

期待しています

PMS本院／臨床検査技師 坂尾美知子

人材難の中で

検査室で働き五年近くになります。当初共に働いたスタッフも今は一人もいません。病院検査室では一番古いスタッフが二年、ついで一年、四ヶ月で、全員パキスタン人です。

現在パキスタン人のアフガンビザ取得が難しく、ダラエヌール・クリニックへ送るスタッフのローテーションができず、今年三月に雇った経験浅いアフガン人スタッフ一人に任せている状況です。彼は一月半をクリニックで、残り五日ほどまとめて休暇、そして一〇日ほど病院で研修・勤務の後、ダラエヌールに戻ります。

ダラエヌールで検査し終わった標本は送り返してもらい、病院のスタッフ・本人で再チェックしています。標本の再チェックは、一人勤務でも手を抜かないようにと一年半ほど前から始めた事ですが、実際にしてみるとマラリアや皮膚の風土病であるリーシユマニアなどは病院よりも圧倒的に

クリニックで陽性例が多いので、病院のスタッフにとってもよい経験になっています。

今年に入り病棟回診に検査室からは参加しなくなりしました。その時間を実技・学習に力を注ぐようにとの意図です。リーシユマニアの標本作成やハンセン氏病の検査の技術向上のため、医師や退職した技師の協力も頂いて進めています。

病棟回診に参加しなくなったのには、女性患者とのトラブルで免職になった技師の痛い経験からでもあります。看護部や経理や多くの方の協力も得て、患者さんとの接触を少しでも減らすようにと外来ルートを変更したり、検体置き場を新たに作ったりしましたが防ぐことができなかったのは残念です。

専門大卒の技師が入職

スタッフの入れ替わりが激しく技術習得に追われ、またこの一年半程は現地技師が不在で技術補佐員と訓練生のみであったため、なかなか系統だった学習が難しい状況でした。パシユトウ語の本で一時学習が進んでいたのですが、アフガン・パシユトウ語であり、中心となるアフガン人がいなくなり途絶えていました。

最近やつと大学・検査技師の学校(二年)を出たスタッフが入職し、彼を中心に英語の教科書による学習が再開しました。彼が英語で読み、パシユトウ語で説明し、その後二人のスタッフも声を出して読みます。声を出して英語を読むことに首

を振っていたスタッフには大きな前進です。試薬や機械の説明書は英語のため、英語が読める、理解できるという事は現地では重要です。

条件的には日本のように恵まれてはいませんが、その分技師として意欲をかき立てられることも多々あります。自分の目で観察することの大きさ・喜びを感じる日々でもあります。

この間支えて下さったまわりの方々、現地を暖かく見守り支えて下さった日本の皆様に感謝しています。そして、現地に参加したいと思われる技師の方の出現を期待しております。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますようお願いいたします。

▼未使用の切手、ハガキを！

*会報の発送等の通信費に、年間数百万円がかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。(使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい)

*一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

パシヤール語も徐々に習得

ドラエ・スール診療所受付 竹内英允

患者とのやりとりが楽しみに

アフガニスタンの中でも辺境地に位置するドラエスール診療所では、時折ラジオから流れてくる内乱やテロのニュースなどがまるで遠い地の出来事のように、山積みの書類に追われる単調な日々で自分が異国にいる事を忘れてしまう時があります。しかし、ふと事務作業の手を止めて診療所を眺めてみると青いブルカを被って診療を待つ女性患者さん達が何十人もベンチに並んで座っている光景が目に入り、やっぱりアフガンにいるんだという実感が沸々と湧いてきます。

気が付くと診療所に勤務して一年が経ち、普段自分では気付かない自分の成長も他人の一言で気付かされることもあります。農業計画担当の進藤さんが私に用があり診療所に立ち寄った時に「キリのいい所で竹内さんに話かけようと思って背後で待ってただけけど、全然なくて。一人受付が終わると一秒ぐらい間があると思ってただけ、それもなくて。いやー恐かった（おそらく受付の業務が）」。と言われた事がありました。以前は我

先にと殺気立って受付に群がる患者さんに私も圧倒されていたのですが、いつの間にか現地の人と触れ合える楽しい時間となっています。

山の女性患者

受付で苦労したのはパシユトゥ語が通じないワイガル村からの女性患者さんとのやりとりでした。ワイガルは診療所より更に車で行ける所まで奥に行き、そこから山道を四〇分ぐらい歩いてやっと村の入り口までたどり着けるといって、まさに辺境の地。そこでは女性はブルカをかぶらず伝統衣装を着て、パシヤール語（山の言葉）も他の村の人達より訛りがとても強いようです。

そんな辺境地からワイガルの患者さん達は四時間以上かけて子供を背負いながら診療所まで来ます。受付では名前、父親の名前、年齢を一人一人聞いていくのですが、彼女達は連れの患者さんの名前を四、五人一気に言ってきます。私も片言のパシヤール語で年齢を聞くのですが、とにかく患者さんの名前を繰り返して言ってくるのです。見かねて周りの人が「何歳なの？」と合唱しはじめて、やっと気付いて年齢を言ってくれます（周りがわかっている私のパシヤール語はなんとか通じているはずである）。

私も初めは人の話を聞かない人達と思い込んでいたのですが、ある日もかしたら彼女達も緊張しているのもしれないということに気付きました。考えてみれば普段外国人（しかも男性）と接する機会はなく、外国人男性から処方箋を受けとるのも彼女達にとっては冒険なのかもしれない。私自

身受付はとても緊張していたのですが、相手も同じように緊張していたと思うとなんか親近感が湧いてきました。それ以後私もパシヤール語を覚えるように意識するようになりました。そうすると相手も安心しスムーズに受付ができるようになりました。

初めは先入観が邪魔して見えなかったことが、時間が経つにつれて見えてくるようになりました。生まれた場所、文化が違えば同じ人間。少し現地の視点で物事を見つめると素朴で親切で陽気で誇り高い、そして少し不器用なアフガン人の姿が見えてきます。私がこの一年間で得た事は心からアフガン人が好きになったということです。援助などという上から物を見る立場ではなく、同じPMS職員として現地スタッフと力を合わせてこれからも活動していきたいと思っています。

▼郵送方法の変更について▼

*一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

*ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

●用水路完成式典に参加して(1) 砂漠だった四年前が 想像できない光景でした

ペシャワール会事務局 野田智子

「アッラーアクバル! (神は偉大なり)」。現地
で何かあったら叫ぼうかなと思っていた言葉です。
用水路の第一期工事完成祝いのセレモニーに参
加する為、四月末アフガニスタンへ行ってきました。
治安の悪さが伝えられ、不安がなかったわけ
ではありませんが、それでも行かねばならない気
持でした。めだたないように、女性達は地味な色
のコートとベールで身を包みました。日中戸外は
四〇度近くもありそうでしたが、現地の風習に従
いました。

国境の町トルハムには、ジャララバードから芹沢
さんが迎えに来て下さっていました。最初に訪ねた
のはガラエヌールのパイロット農場。伊藤さんや進
藤さんに畑を案内してもらい、協力農家のアキルシ
ヤーさんにはお茶をこちそうになりました。彼は民
族楽器フパーブ(桑の木で作った弦楽器)の名手で
もあり、楽器も作る優秀な農民なのです。雪をいた
だく山並が美しいこの村で、色々な作物品種の試験
栽培がゆつくりしかし着実に成果をあげているなか
「サツマイモ誕生の地PMS農業プロジェクト」と
書かれた看板が目をひきました。農業はこれからも

楽しみなプロジェクトです。

次に竹内さんが働くガラエヌール診療所へ。患者
さんはひっきりなしで、たった一人のドクターの診
察時間はひとり数分、順番を争って患者さん同士が
時折激しい喧嘩をするそうです。竹内さんはどうや
って患者さん達を整理しているのでしょうか。

翌日はいよいよ水路を見学。筆舌に尽くせぬ幾
多の闘いを経て完成した、中村先生の「不屈の意
志と忍耐と汗の結晶」です。最初の難関だった取
水口では、中村先生に怒鳴られながらも必死
で働き任務を終えた、なつかしい日本人ワーカー
たちの顔が浮かびました。

クナール河の側でダンプカーとともに工事中だっ
た中村先生は赤銅色に日焼けされ、どこから見ても
「ドクター」ならぬ立派な「土建屋さん」でした。
近くの岩山から見下ろすと収穫を待つ黄金色のパッ
チワークのような麦畑が一面に広がり、砂漠化して

●用水路完成式典に参加して(2) 用水路よ、永遠に!

ペシャワール会事務局 藤野洋子

三年八ヶ月ぶりのペシャワール。PMSに着
くとスタツフが声をかけてくれました。私もいつ
ものように挨拶します。「アッサラムアレイク

いた元の光景を全く想像できませんでした。

日本人ワーカーたちが現地の人達と現地の言葉で
コミュニケーションをとっている姿は、「語学の才
のない日本人」ではありません。あるワーカー曰く、
中村先生に作業の状況を報告すると「君はそこで何
をしたか?」と聞かれるのだそうです。

水路の上をアメリカの軍用ヘリが毎日飛んでゆき
ました。道路でアメリカ軍の車にすれ違う時、こち
らのドライバーは車を止めねばなりませんでした。
トルハムのパスポートオフィスの係官は、私達
にPMSが掘った井戸の水をすすめながら言いま
した。

「色々な国から金を稼ぎにくる。しかし日本人
だけが仕事の結果を残していく」。

何か起こったら叫ぶ予定だった言葉は、旅の途
中からすっかり忘れていました。アッラーが守っ
て下さったようです。

ム。

私は二〇〇〇年六月から二〇〇三年八月まで年
二〜三回一ヶ月半程PMSに行き、会計の手伝い
をしました。最初は日本で必要な現地会計書類を
整理して持ち帰っていましたが、そのうち現地の
会計も公に通用する複式簿記にしようということ
になり、当時の担当ワーカーだった藤井さんと話
し合いながら少しずつ変えていきました。藤井さ
んは会計は全く経験がなく理解してもらおうのに大
変なこともありましたが、今ではその弟子の二人
のスタツフ(シャザードとシャヒッド)がコンピ
ュータを使ってしっかりと仕事をしていて、現会



用水路完成セレモニーに出向いた事務局一行。後ろは用水路によって
耕地となった田畑（前列左端が藤野、中央が野田）

計担当の村井さんの「彼らがいるので留守にしても安心」との言葉を聞くと嬉しくなります。

さて今回の訪問は用水路の第一期工事完成式典出席のための事務局視察団としてでしたので、すぐにジャララバードへ出発しました。カイバル峠を通り、トルハムの国境への道は土色の岩山だったのが緑が多くなり驚きました。パキスタン政府が緑化運動を推進し豆科の植物や乾燥に強い木を植えていて、時折見える夾竹桃の薄桃色の花が目をおもててくれ、危険地域だということを忘れてしましそうです。

トルハムの国境を過ぎるとすぐPMSの井戸が見えます。四基の井戸は、水がなくてパキスタン

側からもらい水をしていたアフガン側の人々にとつて、どれほどの恩恵があるか計り知れませんが、国境を過ぎてしばらく行くとオリブ畑が砂漠の中に見えてきます。ここは四五年前にロシアが作った水路が延々と六〇km流れてきて、その水で潤っているとのこと。左手にはスピンガル（白い山）が頂に白い雪を冠して連なっています。美しい景色ですが、アフガンで山と雪を見るときあの雪は解けてしまわないのか、大丈夫かと心配になります。

アフガニスタンに入るのは二度目で、前は二〇〇三年三月一九日に今回完成した用水路の竣工式があり、藤田さんと同行させていただきました。今回完成セレモニーがあったシェイワのK池と同じ場所ということでしたが、辺りは一木一草無い荒地で本当にここまで水がくるのだろうかと思いが半信半疑でした。しかし地元の有業者や長老の前で着工を宣言したからには後には引けないと、身が引き締まる思いがしました。

今回同じ場所での完成の式典に出席できた事は感慨深いものがあります。取水口から全長一三キロ。車で辿る事は簡単ですが、最初の振りから最後までスコップをふるった地元の人々、中村先生の下でそれぞれ試行錯誤しながら任された仕事をやり遂げた日本人ワーカーの青年達、自らウンボに乗り仕事の先頭に立たれた中村先生のご苦労を思うと、この流れが絶えることなく乾いた大地を潤し、人々に豊かな実りをもたらしてくれることを願ってやみません。ゼンダバード、アフガニスタン！

アリアナ大地の心

叫ぶ

甲斐大策

7

二十七年前の夏、私はアフガニスタン東部山中のある尾根筋にいた。北方、ジャララバード方面へ向う旧ソ連軍のミグ戦闘機が、くり返し低空で飛来する。若いバクティアの戦士達は空を仰いで叫ぶ。「神は偉大なり、永遠なれバクティア！」

カシミア紛争の最前線が舞台の印度映画を観た。指揮官が、ムスリムの遺体埋葬はイスラムの約束どおり丁寧に、と命じるなどそれなりの配慮は見えたが、印度の国威発揚映画であるのは確かだった。

ヒマラヤ西北の谷を兵士達が往く。カーリーの名の下に、と叫んで突撃したのはグルカ兵の小隊だった。パンジャブ師団は一勢に、クリシュナに栄光を、とどよめく。シーク大隊の先鋒は、ドゥルガと共に、と絶叫し突撃し、対峙するイスラム勢力は、アッラーフ・アクバル、と叫ぶ。

この上なく美しい山と谷に、兵士達は神の名を叫んでは仆れていた。その報せを受けた兵士の家族達もまた神の名を叫ぶ。

愛、歓喜、嘆き、怒り、恐怖、いずれの感情であれ溢れ出る表現として人間は叫ぶ。声には出さない心の絶叫もあるだろう。そんな時、決して揺るがない至高の存在あつての叫びを思う。

谷にこだましたアッラーやバクティアの叫び、また映画とはいへヒンドゥーの神々の名を耳にし、宗教心の有無や在り方の更に深層、叫びの心(コア)とでもいう存在を考える。

この列島に生きてきた民族は、何をどのように、今後何を叫ぶのか、をも考える。

●ワーカーOB報告④ 現地での経験を

地域医療に生かしています

元 PMS 病院医師 小林 晃

会員の皆様、大変ご無沙汰しています。私は一九九七年から二〇〇一年まで、PMS 医師として妻と子供二人を連れ現地で活動しました。現地での四年間は私にとって楽しいものですが、家族にとっては苦勞の連続でした。しかし今では貴重な体験と思えるようになっていきます。

学生時代は、アジアの混沌とした所に惹かれ、何度か放浪の旅に出かけ、卒業旅行でベシャワールを訪れ、らしい診療をしていた中村先生にお会いしました。このような縁もあり、一九九七年に現地に赴任しました。現地は熱帯病の宝庫で、らい、腸チフス、マラリア、アメーバ赤痢、また回虫などの寄生虫疾患などが見られ、結核に關しては、肺結核以外に、腸結核、腎結核など、あらゆる肺外結核も経験することができました。

私の専門知識を活かし、腹部エコーで腸結核、腎結核、胆道に迷入した回虫などの診断に役立てることができ、腸チフスは発熱早期より腹部エコーで腸間膜リンパ節の肥厚を描出することがわかり、現地における不明熱の自分なりの診断過程を確立しました。高度の脱水のコレラ患者を救命できなかったことなど、苦い思い出もありました

が、重症の肺炎や、マラリアスの乳幼児を救命したことなど、医者として充実した日々を過ごしました。

私の現地での主な仕事は、当時、完成したばかりの PMS 病院の検査部門の充実と、医師の指導でした。レントゲンなどの医療機器を円でも安く購入するために、パキスタン国内を奔走しました。私が指導した若い医師は勤勉で、優秀な医師にはイギリスの熱帯医学部に留学させました。しかし、ほとんどの医師がその後、高給を求めて、他の NGO や国連の組織に行ってしまうました。今では、私の指導した医師はほとんど残っていないのを聞き、寂しい思いをしています。現地で本当に必要なとしているのは高度な医療技術でなく、感染症などの疾患を中心とし、らい患者と長く付き合っていくことであつたと反省しています。

私が赴任した翌年、一番下の娘が一歳になつたので家族で現地に行くことに決めました。当初は珍しいこともあり、楽しいこともありましたが、習慣の違いイスラム社会で幼い子供を連れて家族が暮らすのは想像を絶するもので、現地のスタッフの皆様が大変な迷惑をかけてしまいました。それでも三年間は何とか続けることができましたが、とうとう妻が体調を崩し、帰国することに決めました。

帰国後は、志半ばで終わってしまったことと、中村先生のいわれる「世界でもっとも厳しい所」で活動していくのに自分自身の精神力のなさに自己嫌悪に陥る日々をしばらく過ごしました。その後、禅寺に行つて坐禅を組んだり、四国へ歩き遍路に出かけたりしました。しかし、少々坐禅を組み、四国を歩いただけでは自分自身は簡単には変わりませんでした。ただ、自分は渴愛地獄に陥り、

「忘己利他」の精神に欠けていたことに気づき、私のような凡人はあまり背伸びをしようと志が、「心を刺してしまうもの」になり、「今できることをやる」というのでいいのではないかと感ずるようになり、少し心が軽くなったと思います。

一昨年の四月より、タイのマヒドン大学へ熱帯医学の勉強に行きました。参加している日本人は私を含め四人でしたが、驚いたことに、その中の二人は私の知人で、一人は一昨年の一月からベシャワールにいた仲地先生でした。大学の授業を受け、ベシャワールで経験したことが如何に貴重なものであつたかがわかりました。多くのリーシユマニア患者やらいの新患者を経験した人は私や仲地先生以外には講師でさえ殆どいませんでした。PMS 病院のように地域に根ざした医療を行える NGO 組織は世界でも稀のようです。

現在は、徳之島で地域医療に励み、毎日多くの患者さんを診療しています。一〇年以上も徳之島にいと多くの患者が私を慕ってきてくれるのは嬉しいものです。毎年秋には現在の病院のスタッフ有志のおかげでパザーを催すことができ、少額ですがベシャワール会に募金をさせていただいています。

お陰様で妻も子供たちも元気にしています。中村先生に遊んでいたいた長男は小学六年生になりました。以前、長女に冗談で、「また、ベシャワールに行こうか」と聞いた所、「パールコンチネンタル・ホテルのアイスクリームを食べに行くのなら行く」と言っていました。私も、熱風が吹く中で、汗を拭きながら、髯面の男たちと囲んでチキンカライを食べたくまりました。今後は「私のできること」で、一隅を照らすことができると考えています。

●事務局便り

*灌溉用水路の第一期工事十三キロが完成し、第二期工事七キロの着工も兼ねて四月二十三日、現地アフガニスタンでセレモニーを行った。四十度近い気温の下、あてやかな色彩のテントは現地有力者や日本大使館関係者を含めた三百人で埋まり、民族音楽の楽隊が高まる気分をさらに高揚させ、テントの外は地元農民や子どもたちであふれていた。

第二期工事着工のテープカットと同時に行われたシヨベルカーでの鉄入れ式を、ビデオカメラのレンズを通して見つめていた片方の目からは、不覚にも涙がこぼれた。削り取った土をダンブカーの荷台に運んだ後、中村医師は、パンザイをするようにシヨベルカーのアームを高く上げると、踊るようにくるくと旋回してみせた。

用水路の建設に着手したのは二〇〇三年の三月十九日米軍によるイラク侵攻の前日である。あれから四年、第一期全長一三キロメートル、十二万本の柳の帯を縫って一日五〇万トンの水が流れる。直接灌漑される耕地は約九〇〇ヘクタール、砂漠化した無人地帯に村が復活し、黄金色の小麦が風にそよいでいる。さらに、クナール河沿いで冬期渇水に悩む地域約六〇〇ヘクタールも、ケシを作らず小麦の収穫が保障される。従事したのは現地農民延べ三十八万人。総工費約九億円は会員・支援者の会費と寄付に

よる。日本人のところが、アフガンの大地に静かに刻印されたのである。

【会則改訂のお知らせ】六月二日に開催された理事会で、ベシワール会の会則改定案が提起され、同日、総会にて承認されました。目的は会運営をより円滑にするためです。御報告いたします。

◎村から

私がベシワール会員になったのは、十年以上前ですが、会費を送るだけで事務局でどういう作業をされているのかを考えることもありませんでした。子育ても一段落し、ふと事務局では、どんなことをされているのだろう、何か私にもお手伝いできることがあればと覗いたのが、一昨年でした。今では、いろいろな年代の人たちが、思いを同じにして活動しているこの場がとても楽しく一週間行かないと寂しくなります。一番、驚いたことは、多くの会員を抱える会なのに事務局はこれだけのスペースなの？ということ。たくさんの方の会報をこの部屋から、よく発送できるものだと感心します。また、輪ゴムやひも、紙なども無駄にしないで、最後まで使うという精神。寄付の九五％が、現地のために使われるというのを、ここに来てほんとにそうだと感じます。自分の小さな手伝いが役に立っていると思える事務局です。一度も来られたことのない方は、ぜひ一度来られたら、きつとますます支援したくなると思います。(S)

丸腰のボランティア

中村哲・編
ベシワール会日本人ワーカー・著
すべて現場から学んだ診療所をつくり、井戸を掘り、用水路を建設する―。現地日本人ワーカー47名による活動報告集 【重版】1890円

空爆と「復興」 【2刷】1890円
辺境で診る 【3刷】1890円
辺境から見る
ダラエヌールへの道 【3刷】2100円

医者 井戸を掘る 1890円
【10刷】
医は国境を越えて 2100円
【6刷】
ベシワールにて 1890円
【8刷】

聖愚者 甲斐大策
の物語
「表紙をめぐる小さな物語」
が、書下しを加え一冊に 1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
TEL 092 (714) 4838
アフガニスタンの診療所から
609円
筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4
TEL 03 (5687) 2670
価格はすべて税込価格(税5%)です

会 則

- ① 本会の名称をベシワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
- ⑦ 本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
- ⑨ 本会の事務局をFARAH HOUSE (〒八一〇一〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇一―二五 上村第二ビル六〇三号 TEL七三二―一三三七二) 内におく。